

Critical Service-Learningとは何か —英語論文における研究関心の動向をめぐって—

山田一隆*

What is Critical Service-Learning? — Trends in Research Interests in English Academic Papers —

Kazutaka YAMADA

Abstract

This paper aims to clarify the concept of Critical Service-Learning (CSL) by analyzing trends in English-language academic research. According to Mitchell (2008), CSL is characterized by three core components: (1) a social change orientation, (2) working to redistribute power, and (3) developing authentic relationships. These elements distinguish CSL from traditional service-learning (SL), emphasizing a more critical and justice-oriented approach to education and community engagement.

Using the Scopus database, this study analyzed abstracts from 5,281 SL-related and 84 CSL-related articles. A text-mining analysis was conducted to explore differences and transitions in research interests between the two domains. The results revealed that CSL studies tend to focus on concepts such as justice, power, and relationships, highlighting an engagement with broader social and political contexts rather than pedagogical or evaluative concerns typical of traditional SL research.

Furthermore, a co-occurrence network analysis identified seven clusters representing major areas of CSL research: (1) philosophical foundations of CSL, (2) language and identity, (3) youth engagement in addressing social issues, (4) pedagogical strategies, (5) teacher education, (6) participatory citizenship and global engagement, and (7) the “engaged campus.” These clusters correspond to Mitchell’s (2008) three essential elements and demonstrate the expanding scope and multidimensional nature of CSL research.

The findings suggest that CSL should not be regarded merely as an instructional method but as an epistemological and practical framework for fostering social transformation and democratic renewal. Through its emphasis on critical reflection, equitable relationships, and collective action, CSL offers a pathway toward reimagining higher education as a site of civic responsibility and social justice.

Key Words : Critical Service-Learning; Community Engagement; Identity; Justice; Social Change

1. はじめに

1.1 問題意識の所在

本稿は、米国を中心とした英語論文から、サービス・ラーニング (SL) 関連研究および CSL 関連研究の関心の動向を概括的に把握することで、critical service-learning (CSL) とは何か、に関する輪郭を仮説的に把握しようとするものである。

CSL は、わが国では、批判的サービス・ラーニングと訳されることが多いので、さしあたり、本稿でも紙幅の都合も考慮し、当該邦訳を採用して論を進める。ただ、この「批判的」という日本語の単語のもつ含意と、critical という英語の単語のもつ含意

とに、微妙だが重大なニュアンスの違いを感じ、あるいは、違和感を抱いていることも、先に告白しておく。

批判的サービス・ラーニングは、後で詳述する Mitchell (2008) に拠れば、①社会変革志向 social change orientation、②権力の再配分への取り組み working to redistribute power、③真正な関係性の構築 developing authentic relationships、の3つの核となる要素を含み、リフレクション reflection を媒介にしながら、教室での活動 class component と現場での活動 community component とを往還する (p. 53)。この時、学生は、学習者であると同時に、不平等なコミュニティのありように立ち向かう社会変革の担い手 agents of social change でもある (p. 51)。

* 東海大学文理融合学部地域社会学科教授

わが国をはじめ、世界全体で分断と民主主義の危機といわれる¹⁾なかで、包摂と連帯を志向する社会変革が望まれる。そこで、筆者が注目しているのは、批判的サービス・ラーニングである。ゆえに、本稿では、わが国において、批判的サービス・ラーニングの実践が広まり、それを支える理論面も含めた研究がより前進することに寄与すべく、米国を中心とした英語論文での CSL に関連する研究論文を対象に、論文要旨の内容分析から、SL 関連研究と CSL 関連研究の関心の異同や経年的変化、および、CSL 関連研究における研究関心の分布を明らかにすることを目的とする。

ところで、SL は、本来、Neururer & Rhoads (1998) がいうように、学生や教育機関を、地域社会やより大きな社会的公益と結びつける手段として機能すると同時に、学生に地域社会と社会的責任の価値を身につけさせる」(Mitchell 2008: 50) ものである。にもかかわらず、あえて、critical と前置きして、「従来」の SL を traditional と区別して、語る必要があったのか。Mitchell (2008) を中心に、先行研究で簡単にみておくことにしたい。

1.2 先行研究

先述の Tania D. Mitchell は、批判的サービス・ラーニング、社会正義教育、高等教育における市民的エンゲージメントを研究する、米国ミネソタ大学教育・人間発達学部の准教授 (2025 年 10 月 29 日現在) である。

Mitchell (2008) は、明確な社会正義の目的を持つコミュニティ・サービス・ラーニングに対する「批判的」アプローチを提唱する文献調査を通して、従来のサービス・ラーニングとの相違点として、批判的サービス・ラーニングには、社会変革志向、権力の再分配への取組み、真正な関係性の構築、の 3 つの核となる要素を提示した論文である。わが国だけでなく、国際的に広く知られた論文である。

「従来のサービス・ラーニング・プログラムの変革的な性質を称賛している。すなわち、より寛容で利他的、文化的意識の高い学生を育成し、より強力なリーダーシップとコミュニケーション能力を身につけさせ、さらに、わずかながらもより高い成績平均点を獲得し、サービス・ラーニングを経験していない学生よりも優れた批判的思考能力を身につけさせる」といった研究は枚挙にいとまがない。しかし、Neururer & Rhoads (1998) をはじめ、一部の研究者がいうように、「あらゆる形態のコミュニティ・サー

ビス活動が等しく思いやりの倫理観を育み、成熟したアイデンティティの開花をもたらし、地域社会への理解を深めると主張するのは誤解を招く」(Mitchell 2008: 51) と主張している。なかには、「コミュニティ・サービス・ラーニングが慈善活動や「強制的なボランティア活動」と批判され、確立されたヒエラルキーを強化するものであり、父権主義的であると批判されている」(Mitchell 2008: 51) ものもあると指弾し、Robinson (2000) を引いて、「脱政治化された実践としてのサービス・ラーニングは「美化された福祉制度」に堕すると、手厳しい。さらに、「配慮と意識を働かせず、社会問題の根源的原因に注意を向けず、学生をその根源的原因に対処する行動や取り組みに関与させなければ、サービス・ラーニングは学生の善意を超えた影響を持たないかもしれない。実際、そうした問題や懸念に注意を払わないサービス・ラーニング体験は、不平等を永続させ「我々対彼ら」という二分法を強化する形で学生をコミュニティに関与させる可能性がある」と続ける (Mitchell 2008: 51)。

つまり、伝統的アプローチのサービス・ラーニングは、「特権的な学生を動員し、特権システムへの参加と受容を促し、既に存在する不公正な社会構造の維持を強化し、構成員である地域社会、学生、私たち自身に芽生えたはずの「急進的な傾向を元通りに「正常化」する」作用をもたらす」というのである (Mitchell 2008: 51)。

それに抗する批判的サービス・ラーニングは、社会正義への明確な指向性を持ち、Rosenberger (2000) いわく、「サービスを「個人のニーズを満たすものだが、構造的な不平等を変革する政治的行動とは通常見なされない」とする従来の見解に異議を」(Mitchell 2008: 51) 申し立てるものであるという。社会正義アプローチによるサービス・ラーニングは、従来のサービス・ラーニング科目よりも、複雑な思考力と推論力を育み、奉仕活動がもつ政治的本質が埋め込まれ、より伝統的な市民観よりも社会正義を追求する。したがって、この教育手法の指向性は、教育者に社会的責任と批判的コミュニティ課題に焦点を当てることを要求することで、サービス・ラーニングを「社会的・政治的改革のための問題解決手段」たらしめるのであるという (Mitchell 2008: 51)。

このようにみると、「社会的正義に関わっていることで、サービス・ラーニングは厳密には価値中立的なものではない」(ジャコビー 1996=2007: 48) ことを前提にしなければならないことを想起する。教育

者自身は、「特定の政治的集団や個人的に抱いている政治的見解の影響を参加者が受けないように、最大限の努力を払わなければならない」（ジャコビー 1996=2007: 48）のか、あるいは、教育者自身の「社会的・政治的改革のための問題解決手段」に対する価値意識を明確すべきなのか、その「あいだ」で常に葛藤を抱きながら、実践に臨むべきであろう。批判的サービス・ラーニングとは、「伝統的な」サービス・ラーニングがもつ社会変革性というその本質論に、改めて、正面から向き合うことに他ならないであろう。

次章以降では、英語論文の批判的サービス・ラーニング（CSL）関連の研究関心の動向を、サービス・ラーニング（SL）関連のそれと比較しながら、分析を行う。

2. 研究方法

2.1 分析対象と分析方法

本稿では、エルゼビア社が提供する世界最大級の抄録・引用文献データベース「Scopus」²⁾に搭載されている論文等のうち、英語で書かれている論文（Article）を対象とする。まず、サービス・ラーニングおよび批判的サービス・ラーニングに関する研究論文数の経年的変化をみたうえで、研究論文の要旨（Abstract）について、テキストマイニング分析を施し、研究関心の経年的変化、および、被引用数の多寡による研究関心の異同を明らかにする。これらの分析を通して、わが国における批判的サービス・ラーニングの研究および実践に向けた示唆を考察する。

Scopus に搭載されている 2024 年までに公開された「サービス・ラーニング」³⁾および「批判的サービス・ラーニング」⁴⁾に関する研究論文は、2025 年 10 月 12 日現在、それぞれ 5,281、84 であった。このように、サービス・ラーニングに関する論文のなかでも、批判的サービス・ラーニングに関するものは、ごく限られていた。これらの論文を対象に、著者、題目、公開年、要旨、被引用数に関するデータベースを作成し、テキストマイニングソフトを用いて、要旨の内容分析を行った。

2.2 倫理的配慮

本稿における分析は、ヒトを対象としていないため、いわゆる倫理審査の対象外と考えられる。また、本研究において、筆者と分析対象との間に、利益相

反関係はない。

3. 分析結果

3.1 サービス・ラーニングおよび批判的サービス・ラーニングに関する研究論文数の経年的推移

図 1 は、Scopus に掲載されているサービス・ラーニングおよび批判的サービス・ラーニングに関する研究論文数の経年的推移をみたものである。これに拠れば、サービス・ラーニングに関する研究論文の初出は、1950 年の Simpson (1950) までさかのぼる。その後、20 余年、論文の公開はみられなかったが、1974 年に、Sanoff (1974) が公開されて以降、ほぼ毎年、1-2 本程度、公開されるようになる。次の画期は、1993-94 年ごろであり、年間の公開本数が二桁に上るようになる。さらに、2006 年には、三桁に上るようになり、2010 年には 200 本、2020 年には 300 本と、直近 20 年間での本数の伸びが著しいことがわかる。

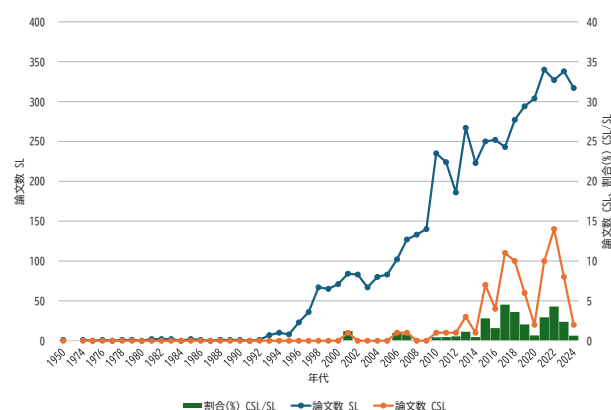


図 1 サービス・ラーニング（SL）および批判的サービス・ラーニング（CSL）に関する研究論文数の経年的推移

表 1 は、サービス・ラーニングの教育実践、研究面で画期となったできごと、および、米国における主なサービス・ラーニング研究雑誌⁵⁾の発刊時期を示したものである。図 1 の結果を表 1 に重ね合わせると、1994 年のミシガン大学による Michigan Journal of Community Service Learning (MJCSL) 誌、1996 年のジョージア大学による Journal of Higher Education Outreach and Engagement 誌の発刊を契機として、研究論文数が伸長し始めていることがわかる。これらの雑誌は、各大学の構成員だけに閉じられたものではなく、サービス・ラーニングに関連する研究者、実践者からの投稿を広く受け付けており、編集・査読体制も学外に開かれたものと

表1 サービス・ラーニングに関する実践と研究に関する略年表

年	サービス・ラーニング関連小史	サービス・ラーニング研究雑誌の発刊
1967	「サービス・ラーニング」の初出（南部教育委員会、The Southern Regional Education Board, SREB）	
1971	全米経験教育協会の設立	
1982	サービス・ラーニングとリーダーシップのための国際パートナーシップの設立	
1983-1989	全米経験教育協会が高等教育改善基金の支援を受けてサービス・ラーニングに関する研修を実施	
1984	キャンパス・アウトリーチ・オポチュニティ・リーグの設立	
1985	キャンパス・コンパクト（Campus Compact）の設立	
1990	「サービスと学習の統合に向けた優れた実践の原理」	
1990	全国・地域サービス信託法の可決	
1990	全国・地域サービス連邦公社	
1990-2011	全国・地域サービス連邦公社によるラン・アンド・サーブ・アメリカ	
1994		Michigan Journal of Community Service Learning（ミシガン大学）
1996		Journal of Higher Education Outreach and Engagement（ジョージア大学）
2000	「高等教育の市民的責任に関する学長宣言」	
2000		Journal of College and Character（全米学生部門人材管理者協会（NASPA））
2001	国際サービス・ラーニング地域貢献学会（International Association for Research on Service-Learning and Community Engagement）の設立	
2008		Journal of Community Engagement and Scholarship（アラバマ大学）
2012	政策文書『困難な時代に 大学教育と民主主義の未来』	
2012		Partnerships: A Journal of Service-Learning and Community Engagement（～2020、ノースカロライナ・キャンパス・コンパクト）
2013		International Journal of Research on Service-Learning and Community Engagement（国際サービス・ラーニング地域貢献学会）

なっている。このことが、研究対象としてのサービス・ラーニングの「発見」に少なからず貢献しているとみることができるだろう。21世紀に入ると、さらに、大学学生部門の専門職員の組織 NASPA の研究雑誌 Journal of College and Character 誌（2000年）、アラバマ大学による Journal of Community Engagement and Scholarship 誌（2008年）、ノースカロライナ・キャンパス・コンパクトによる Partnerships: A Journal of Service-Learning and Community Engagement 誌（2012年）⁶⁾が、矢継ぎ早に発刊され、サービス・ラーニング研究が広く認知されるようになったものとみられる。

こうしたなかで、注目しておかなければならないのは、2001年の国際サービス・ラーニング地域貢献学会（IARSLCE、International Association for Research on Service-Learning and Community Engagement）の設立と、2013年の International Journal of Research on Service-Learning and Community Engagement（IJRSLCE）誌の発刊であろう。IARSLCE は、2001年

に設立されたサービス・ラーニングに関する世界最大の学会であり、2025年8月現在、437名の個人会員等で構成されている⁷⁾。2013年の IJRSLCE 誌の発刊以降、サービス・ラーニングに関する研究論文数は顕著な伸びを示している。これは、IJRSLCE 誌が、Scopus の格納雑誌であることも影響しているとみられる⁸⁾が、同誌は年誌であり、1号当たりの掲載論文数は、近年でも10-15本程度であることを考慮すると、他誌でのサービス・ラーニングに関する実践研究が大きく数を伸ばしているとみられる。さらに、この時期から、CSL に関する論文本数も割合は少ないものの、毎年数本程度が公刊されるようになっていく。IARSLCE の世界的な展開が、各国の地域性を反映したサービス・ラーニングの実践を発掘することに貢献してきたことと重なりあう。すなわち、わが国のように、社会体験学習の教育手法として「輸入」された地域と、中南米やアフリカのように、地域や社会の課題を改善、克服する方法論として導入された地域とでは、同じ「サービス・ラーニング」

という用語を用いていたとしても、それが含意する範囲や価値が大きく異なっている⁹⁾。実践論としても、理論面でも、CSL がサービス・ラーニングの本質として語られる場面があるのは、そうしたことが背景にあるし、民主主義の危機や社会の分断が現実味を帯びている、わが国や欧米などの先進諸国においても、CSL の意義や価値を、改めてかみしめるべき状況にあるといえるだろう。

3.2 批判的サービス・ラーニングおよびサービス・ラーニングに関する研究論文の関心

本節では、Scopus に掲載されている批判的サービス・ラーニング (CSL) およびサービス・ラーニング (SL) に関する研究論文について、データベースから要旨 abstract を抽出し、テキストマイニングソフトを用いて、内容分析を行う。

すなわち、まず、当該要旨に頻出する語を確認したうえで、それらの共起ネットワーク分析から、CSL および SL に関する研究論文の関心の分布について検討する。次に、出版年代、および、被引用回数の別に、対応分析を用いて、研究関心の推移について検討する。

これらの分析にあたっては、テキストマイニングソフト KH Coder 3. Bata. 05b を用いた。分析対象とする品詞は、名詞 noun、代名詞 pronoun、外国語 foreign、形容詞 adjective、副詞 adverb、動詞 verb の 6 品詞である。この結果、データベースに含まれる CSL に関する研究論文 84 の要旨に含まれる総抽出語数は 13,742、異なり語数は 2,076 であり、6 品詞に限れば、それぞれ、7,981、1,928 であった。また、SL に関する研究論文 5,281 の要旨に含まれる総抽出語数は 933,196、異なり語数は 23,831 であり、6 品詞に限れば、それぞれ 540,288、21,819 であった。

3.2.1 研究関心の特徴

表 2 は、CSL に関する研究論文に、表 3 は、SL に関する研究論文に、それぞれ含まれている語の頻出語上位を示したものである。論文数の約 2 割程度の出現回数を見込んで、表 2 では出現回数 20 まで、表 3 では出現回数 1,000 までのものを、それぞれ挙げている。

表 2 では、出現頻度 20 以上の 54 語を、第 3 表では、出現頻度 1,000 以上の 64 語を、それぞれ挙げている。ここで、表 2 と表 3 に共通してみられる語、また、いずれか一方にのみみられる語に注目すると、それぞれの研究論文の関心の異同が浮き彫りとなっ

ている。表 2 と表 3 に共通してみられる 38 語には、student、community、program、education、course、project、provide、practice、approach、engagement、model、opportunity、impact、reflection、engage といった、学生の地域社会への関与や、それに関する方法やモデル、リフレクションといった個別の科目やプロジェクト、プログラム実践を想起させる語が多く含まれている。表 2 から、CSL に関する研究論文のみにみられた 15 語には、critical、justice、change、language、partnership、relationship、partner、power、public、traditional といった、コミュニティ・パートナーとの関係性や、社会における正義や権力、公共を想起させる語が多く含まれている。他方で、表 3 から、SL に関する研究論文のみにみられた 26 語には、university、knowledge、outcome、teaching、participant、curriculum、analysis、datum、participate、academic、faculty、educational、professional といった、教授法・教育手法や、カリキュラム、評価を想起させる語が多く含まれている。

これらから、CSL 関連研究、SL 関連研究のいずれにおいても、その研究は、サービス・ラーニングの「ささやかな」実践に立脚したものが多くことが示唆されるといえよう。また、CSL 関連研究では、正義や権力への critical 性に力点が置かれていることが、SL 関連研究では、教育手法や評価、教育機関における制度化への志向が、それぞれ示唆されるといえよう。

3.2.2 研究関心の経年的変化

表 4 は、CSL に関する研究論文、表 5 は、SL に関する研究論文、それぞれにおける Jaccard 係数上位による特徴語 10 語を示したものである。表中、CSL 関連研究のみにみられるもの、SL 関連研究のみにみられるもの、両者に共通してみられるものに、それぞれ記号を付している。これに拠れば、SL 関連論文の特徴語は、年代を問わなければ、CSL 関連論文においてもみられるものが多い。つまり、SL 関連論文の特徴語は、CSL 関連論文においても、時間差で特徴語として挙がっていることになる。SL 関連論文のみにみられる特徴語は、通期で 20 語である。他方で、CSL 関連論文の特徴語は、SL 関連論文のそれにはみられないものが相対的に多くなっており、CSL 関連論文のみにみられる特徴語は、通期で 22 語である。

論文数の関係で、CSL 関連論文は 2013 年以前で丸

表2 CSLに関する研究論文の要旨における頻出語上位

抽出語	品詞	出現回数	抽出語	品詞	出現回数	抽出語	品詞	出現回数
service-learning	☆ Noun	262	health	☆ Noun	42	engagement	☆ Noun	24
critical	■ Adj	208	practice	☆ Noun	41	language	■ Noun	24
be	☆ Verb	202	approach	☆ Noun	38	partnership	■ Noun	24
student	☆ Noun	180	engage	☆ Verb	38	relationship	■ Noun	24
community	☆ Noun	109	research	☆ Noun	38	include	☆ Verb	23
social	☆ Adj	101	development	☆ Noun	36	partner	■ Noun	23
education	☆ Noun	65	provide	☆ Verb	36	power	■ Noun	23
course	☆ Noun	64	use	☆ Verb	36	case	■ Noun	22
teacher	☆ Noun	64	justice	■ Noun	35	paper	☆ Noun	22
project	☆ Noun	61	develop	☆ Verb	34	focus	■ Verb	21
study	☆ Noun	59	explore	☆ Verb	33	framework	■ Noun	21
experience	☆ Noun	55	examine	☆ Verb	31	impact	☆ Noun	21
learning	☆ Noun	53	change	■ Noun	29	learner	■ Noun	21
school	☆ Noun	51	learn	☆ Verb	29	opportunity	☆ Noun	21
pedagogy	■ Noun	48	skill	☆ Noun	29	public	■ Adj	21
article	☆ Noun	45	classroom	■ Noun	27	service	☆ Noun	21
have	☆ Verb	45	finding	☆ Noun	27	traditional	■ Adj	21
program	☆ Noun	45	reflection	☆ Noun	25	model	☆ Noun	20

☆=SL関連論文でも頻出語上位に挙げられているもの / ■=CSL関連論文でのみ頻出語上位に挙げられているもの

表3 SLに関する研究論文の要旨における頻出語上位

抽出語	品詞	出現回数	抽出語	品詞	出現回数	抽出語	品詞	出現回数
be	☆ Verb	19,584	teacher	☆ Noun	1,954	curriculum	□ Noun	1,249
student	☆ Noun	15,015	skill	☆ Noun	1,953	analysis	□ Noun	1,248
service-learning	☆ Noun	11,026	school	☆ Noun	1,904	datum	□ Noun	1,245
community	☆ Noun	6,081	university	□ Noun	1,880	not	□ Adv	1,221
study	☆ Noun	4,520	practice	☆ Noun	1,804	describe	□ Verb	1,191
have	☆ Verb	4,190	include	☆ Verb	1,801	participate	□ Verb	1,182
experience	☆ Noun	4,170	article	☆ Noun	1,748	reflection	☆ Noun	1,155
program	☆ Noun	3,933	activity	□ Noun	1,541	need	□ Noun	1,153
education	☆ Noun	3,916	result	□ Noun	1,500	increase	□ Verb	1,146
course	☆ Noun	3,915	approach	☆ Noun	1,499	academic	□ Adj	1,130
project	☆ Noun	3,463	knowledge	□ Noun	1,470	care	□ Noun	1,118
health	☆ Noun	3,007	outcome	□ Noun	1,465	examine	☆ Verb	1,116
learning	☆ Noun	2,900	group	□ Noun	1,461	finding	☆ Noun	1,094
learn	☆ Verb	2,886	engagement	☆ Noun	1,450	faculty	□ Noun	1,066
social	☆ Adj	2,758	teaching	□ Noun	1,356	explore	☆ Verb	1,064
use	☆ Verb	2,721	model	☆ Noun	1,337	engage	☆ Verb	1,060
service	☆ Noun	2,679	opportunity	☆ Noun	1,335	higher	□ Adj	1,059
provide	☆ Verb	2,641	also	□ Adv	1,283	work	□ Noun	1,045
research	☆ Noun	2,634	impact	☆ Noun	1,280	educational	□ Adj	1,026
development	☆ Noun	2,148	participant	□ Noun	1,256	design	□ Noun	1,021
develop	☆ Verb	2,024	paper	☆ Noun	1,253	such	□ Adj	1,020
						professional	□ Adj	1,000

☆=CSL関連論文でも頻出語上位に挙げられているもの / □=SL関連論文でのみ頻出語上位に挙げられているもの

表4 CSLに関する研究論文の出版年代別にみた特徴語（Jaccard 係数に拠る）

-2013	2014-2016	2017-2019	2020-2022
social ★ ☆ .188	school ■ ☆ .192	service-learning ■ ☆ .296	student ★ ☆ .224
article ★ ☆ .136	teacher ■ ■ .157	student ■ ☆ .206	community ■ ☆ .177
journalism ■ ■ .128	development ★ ☆ .140	critical ■ ■ .202	learning ★ ☆ .132
health ■ ☆ .125	experience ★ ☆ .135	be ■ ☆ .201	course ■ ☆ .115
justice ■ ■ .125	be ■ ☆ .131	course ■ ☆ .156	study ★ ☆ .112
care ■ ■ .122	urban ■ ■ .118	teacher ■ ■ .128	partner ■ ■ .089
critical ■ ■ .120	adolescent ■ ■ .113	education ■ ☆ .116	relationship ■ ■ .087
heritage ■ ■ .118	program ■ ☆ .112	study ★ ☆ .107	finding ■ ■ .086
pedagogy ■ ■ .114	practice ■ ☆ .111	project ■ ☆ .106	research ■ ☆ .082
language ■ ■ .103	have ■ ☆ .110	develop ■ ☆ .101	classroom ■ ■ .081
2023-			
service-learning ■ ☆ .112			
student ■ ☆ .112			
local ■ ■ .109			
be ■ ☆ .105			
higher ■ ■ .090			
intervention ■ ■ .090			
model ■ ■ .083			
health ■ ☆ .081			
do ■ ■ .078			
engage ■ ■ .078			

左列：★=同じ年代のSL論文でも特徴語に挙げられているもの / ■=CSL論文でのみ特徴語に挙げられているもの

右列：☆=全年代を通してSL論文でも特徴語に挙げられているもの / ■=全年代を通してCSL論文でのみ特徴語に挙げられているもの

表5 SLに関する研究論文の出版年代別にみた特徴語 (Jaccard 係数に拠る)

-2001			2002-2004			2005-2007			2008-2010		
service	□	.053	article	★	.036	service-learning	□	.049	be	□	.080
service-learning	□	.049	community	□	.035	be	□	.046	service-learning	□	.076
community	□	.047	project	□	.035	program	□	.043	project	□	.061
article	★	.039	service-learning	□	.034	community	□	.043	community	□	.061
program	□	.038	program	□	.033	course	□	.042	course	□	.056
course	□	.037	course	□	.032	service	□	.037	program	□	.055
school	□	.037	student	□	.030	provide	□	.036	have	□	.050
project	□	.037	discuss	□	.030	project	□	.036	article	★	.049
education	□	.035	college	□	.030	experience	□	.035	education	□	.048
provide	□	.033	describe	□	.029	education	□	.035	social	★	.045
2011-2013			2014-2016			2017-2019			2020-2022		
be	□	.112	student	□	.115	study	★	.085	student	★	.168
student	□	.109	community	□	.080	experience	□	.074	study	★	.102
service-learning	□	.097	experience	★	.074	learning	□	.062	experience	□	.088
community	□	.082	study	□	.072	research	□	.060	have	□	.086
program	□	.068	health	□	.067	learn	□	.059	use	□	.068
have	□	.068	education	□	.066	use	□	.059	learning	★	.063
course	□	.066	project	□	.063	provide	□	.055	social	□	.060
project	□	.066	course	□	.063	include	□	.045	health	□	.057
learn	□	.052	provide	□	.054	university	□	.044	university	□	.051
service	□	.052	development	★	.045	practice	□	.044	skill	□	.046
2023-											
study	□	.087									
education	□	.071									
learning	□	.059									
social	□	.059									
use	□	.057									
research	□	.053									
skill	□	.047									
practice	□	.047									
development	□	.046									
develop	□	.044									

左列：★=同じ年代のCSL論文でも特徴語に挙がっているもの / □=SL論文でのみ特徴語に挙がっているもの
 右列：☆=全年代を通してCSL論文でも特徴語に挙がっているもの / □=全年代を通してSL論文でのみ特徴語に挙がっているもの

めているため、SL 関連論文では 2001 年以前、2002-2004 年、2005-2007 年、2008-2010 年、2011-2013 年を通して期間との比較になるが、各年代で対照してみると、この時期の SL 関連論文と CSL 関連論文の特徴語で、共通するものは、social、article の 2 語である。以降、2014-2016 年では、development、experience の 2 語、2017-2019 年では、study の 1 語、2020-2022 年では、student、learning、study の 3 語であり、2023 年以降では、共通するものはみられなかった。

表 4 の CSL 関連論文の特徴語に着目すると、2014-2016 年、2017-2019 年、2020-2022 年の 3 つの期間は、2013 年以前および 2023 年以降に比べ、SL 関連論文の特徴語との共通性が高い（表中「☆」を付した語が、それぞれ 7、8、6 と相対的に多い）ことがわかる。

3.2.3 被引用回数の別にみた研究関心の特徴

表 6 は、CSL に関する研究論文、表 7 は、SL に関する研究論文、それぞれにおける Jaccard 係数上位による特徴語 10 語を示したものである。表中、CSL 関連研究のみにみられるもの、SL 関連研究のみにみられるもの、両者に共通してみられるものに、それぞれ記号を付している。これにより、CSL 関連研究、

および、SL 関連研究に関して、高頻度で引用される論文の特徴を捉えることができる。これらに拠れば、CSL 関連研究では 11 語が、SL 関連研究では 8 語が、それぞれ他方にはみられない語として析出される。一方のみにみられる語の分布は、CSL 関連研究の 30 回以上の被引用論文において、6 語がみられるものの、10 回以下、ならびに、SL 関連研究のすべての回数階級においては、偏在はみられなかった。データベースに登録されている論文数に差があるので、単純に比較することはできないが、CSL 関連研究のほうが、特定の分野や論文に被引用が偏在し、SL 関連研究のほうが、さまざまな分野や論文が引用される傾向にあると考えられる。別の言い方をすれば、CSL 関連研究で高頻度に引用される論文では、justice、identity、critical、value、journalism、language に関する内容にふれられていることが期待されている、ということでもあろう。

3.2.4 CSL 関連研究論文における研究関心の分布

ここまでみてきたように、CSL 関連研究論文では、コミュニティ・パートナーとの関係性や、社会における正義や権力、公共を想起させる語や、それを実現するためのジャーナリズムや言語習得に関する実践を想起させる語が、特徴的に表れていることが明

表6 CSL に関する研究論文の被引用回数別にみた特徴語 (Jaccard 係数に拠る)

30回以上	10回以上	1回以上	なし
justice	■ ■ .153	social	■ ■ .128
program	★ ☆ .145	school	■ ■ .122
identity	■ ■ .138	teacher	■ ■ .116
critical	■ ■ .135	experience	■ ■ .098
value	■ ■ .130	education	■ ■ .092
journalism	■ ■ .122	course	■ ■ .087
education	★ ☆ .121	skill	■ ■ .081
social	★ ☆ .119	research	■ ■ .081
language	■ ■ .119	development	■ ■ .079
service-learning	★ ☆ .117	approach	■ ■ .075
		service-learning	■ ■ .303
		be	■ ■ .262
		student	■ ■ .250
		community	★ ☆ .193
		project	★ ☆ .166
		learning	★ ☆ .126
		course	★ ☆ .126
		article	■ ■ .097
		partner	■ ■ .081
		explore	■ ■ .075
		critical	■ ■ .128
		classroom	■ ■ .122
		engage	■ ■ .116
		teacher	■ ■ .098
		year	■ ■ .092
		first	■ ■ .087
		relationship	■ ■ .081
		local	■ ■ .081
		intervention	■ ■ .079
		process	■ ■ .075

左列：★=同じ年代のSL論文でも特徴語に挙がっているもの / ■=CSL論文でのみ特徴語に挙がっているもの

右列：☆=全年代を通してSL論文でも特徴語に挙がっているもの / ■=全年代を通してCSL論文でのみ特徴語に挙がっているもの

表7 SL に関する研究論文の被引用回数別にみた特徴語 (Jaccard 係数に拠る)

30回以上	10回以上	1回以上	なし
be	□ ☆ .118	student	□ ☆ .210
service-learning	★ ☆ .114	service-learning	□ ☆ .183
education	★ ☆ .070	study	□ □ .099
program	★ ☆ .068	experience	★ ☆ .097
social	★ ☆ .064	have	□ □ .091
learning	□ ☆ .060	education	★ ☆ .088
service	□ □ .057	course	★ ☆ .084
use	□ □ .052	project	□ ☆ .077
provide	□ □ .052	learn	□ □ .068
research	□ ☆ .050	health	□ □ .066
		community	★ ☆ .139
		course	★ ☆ .095
		project	★ ☆ .087
		use	□ □ .073
		learning	★ ☆ .071
		health	□ □ .070
		research	□ ☆ .068
		development	□ ☆ .057
		skill	□ ☆ .052
		practice	□ □ .051
		project	□ ☆ .048
		learn	□ □ .044
		university	□ □ .037
		skill	□ ☆ .035
		school	□ ☆ .035
		design	□ □ .035
		paper	□ □ .032
		activity	□ □ .031
		opportunity	□ □ .031
		higher	□ □ .031

左列：★=同じ年代のCSL論文でも特徴語に挙がっているもの / □=SL論文でのみ特徴語に挙がっているもの

右列：☆=全年代を通してCSL論文でも特徴語に挙がっているもの / □=全年代を通してSL論文でのみ特徴語に挙がっているもの

らかになった。

本項では、語の共起関係から、CSL 関連研究における研究関心の分布についてみておく。図2は、CSL 関連研究論文の要旨から、最小出現数10の168語について、Jaccard 係数の上位100位までを選択して得た語と語の共起関係を示したものである。21のサブグラフを析出した。これらのうち、5語以上で構成される7サブグラフについて、共起関係をみてみることにする。

サブグラフ01は、service-learning、critical、community、student、socialといった19語で構成される。KWIC コンコーダンスとコロケーション統計を確認すると、experiential learning、social justice、social change opportunity、authentic relationshipといった語の共起がみられた。経験学習を通して、社会正義を学び、社会変革の機会を地域社会に提供し、真正な関係性を築く、といった内容が推察される。CSLの哲学に関するクラスタとみることができよう。

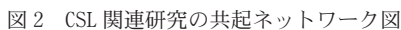
サブグラフ02は、program、identity、awarenessといった9語で構成される。KWIC コンコーダンスとコロケーション統計を確認すると、(critical) language awareness、heritage language learner、(strengthen) identity programといった語の共起がみられた。(非英語話者の)第二言語(英語)習得や先住民族の言語保全など取組とアイデンティティの

涵養、といった内容が想起される。言語とアイデンティティに関するクラスタとみることができよう。

サブグラフ03は、commitment、adolescentといった9語で構成される。KWIC コンコーダンスとコロケーション統計を確認すると、race/class inequality、demonstrate/promote (social) issue、foster adolescent commitmentといった語の共起がみられた。思春期等の若者がCSLに従事し、民族や階層、そして彼ら自身が置かれている格差や不平等といった社会課題を暴き、解決へと導く、といった内容が想起される。若年層のCSL参画による社会課題の解決のダイナミズムに関するクラスタとみることができよう。

サブグラフ04は、pedagogical、strategyといった9語で構成される。KWIC コンコーダンスとコロケーション統計を確認すると、serve/create pedagogical strategy、goal ... exist(ing) (community/relationship)といった語の共起がみられた。既存のコミュニティや関係性における目標に向けて、教育手法の方略を生み出す、といった内容が推察される。CSLの教育方略に関するクラスタとみることができよう。

サブグラフ05は、teacher、experience、classroomといった12語で構成される。KWIC コンコーダンスとコロケーション統計を確認すると、adopt pre-service/preservice teacher experienceといった



れる。「社会参画する大学」¹⁰⁾に関するクラスタとみることができよう。

本稿は、わが国において、批判的サービス・ラーニングの実践が広まり、それを支える理論面も含めた研究がより前進することに寄与すべく、米国を中心とした英語論文での CSL に関連する研究論文を対象に、論文要旨の内容分析から、SL 関連研究と CSL 関連研究の関心の異同や経年的変化、および、CSL 関連研究における研究関心の分布を明らかにしてきた。

まず、CSL および SL のそれぞれ関連する研究論文の数的経年の推移をみると、1978 年の全米経験教育協会の本格的な活動開始、1985 年のキャンパス・コンパクトの設立、1990 年の全国・地域サービス信託法の可決を契機に、サービス・ラーニングの実践は、高等教育において大きく花開くことになる (Jacoby 2015: 15-16)。それに次いで、1994 年の MJCSL 誌の

発刊を嚆矢として、サービス・ラーニングに関する研究論文は着実に本数を増やしてきた。1990年代は、「大学に対して、サービス・ラーニングの範囲を広げ、幅広い社会課題や地域の問題に大学の資源を活用することを求める声が飛躍的に高まり、市民としての大学 (universities as citizen)、社会参画する大学 (engaged campus)、社会参画する学問 (scholarship of engagement) という用語が生まれてきた」時期でもあり、「大学が地域社会の問題を「解決」しようとする一方的なモデルではなく、大学と地域の共通の利益と資源に基づく双方向のパートナーシップを伴う地域参画 (community engagement) である」(Jacoby 2015: 16) との理解が広がった時期と重なる。研究対象としてのサービス・ラーニングの「発見」は、その教育手法のみならず、社会改善志向性をも視野に入れたものであったことがうかがえる。そして、2000年代に入ると、IARSLCEの設立、他の研究雑誌の充実なども追い風に、CSLに関する研究も増え始める。それは、「多様な地域社会や現実社会の課題と積極的に関わることを軸に、「市民としての知識と関わり、異文化に関する知識と能力、倫理的な推論と行動といった個人の社会的な責任感を「本質的学習成果」として強調する米国カレッジ・大学協会の政策文書「グローバルな新世紀における大学での学習」とも呼応するものであろう (Jacoby 2015: 16-17)。

また、研究論文の関心に関する内容分析を通して明らかとなったのは、研究関心の経年的推移では、2013年以前、先行研究で詳述した Mitchell (2008) の論考に代表されるように、「伝統的な traditional」サービス・ラーニングへのさまざまな懸念や批判のなかで、CSLへの期待感とその哲学を埋め込んだ諸実践が展開され、実践的研究として世に問われたのではなかろうか。その後、初中等教育 (K-12) から高等教育に至るまで、民主主義や市民としての責任感を醸成する教育政策が、米国連邦政府により推進される。サービス・ラーニングは、教育効果の高い実践 high impact educational practice として脚光を浴び、学校・大学において制度化が試みされるようになる¹¹⁾。そのことが、CSL実践とその研究にも影響を与え、SL関連研究に通底する制度化に関する論考が増加したのではないかと推察される。そのことは、表5の当該期間のSL関連研究の特徴語において、use, provide, university, skill といったサービス・ラーニングを通じた児童生徒学生の学習成果への関心を示唆する語が散見されている

ことにも表れている。しかしながら、2023年以降は、COVID-19禍を経て、また、世界全体で格差と分断が増長する社会情勢を背景に、包摂と連帯、民主主義社会への関与を強めていくことが意識されるようになってきたのではないかと考えられよう。この時期には、CSL関連研究のみにみられる local, intervention, engage といった語、SL関連研究においても、social, practice といった語がみられることにも表れているだろう¹²⁾。

さらに、CSL関連研究の研究関心の分布を明らかにすべく、語の共起から研究関心の分布を検討した。その結果、主な分布 (サブグラフ) に着目したところ、01) CSLの哲学、03) 若年層のCSL参画による社会課題の解決のダイナミズム、04) CSLの教育方略、02) 言語とアイデンティティ、05) 教員養成課程のCSL、06) 地球市民としての参画行動、07) 「社会参画する大学」と解釈されうるクラスタが析出された。これらのクラスタを Mitchell (2008) の3つの核となる要素、すなわち、社会変革志向 (01, 03, 04)、権力の再分配への取組み (02, 05, 06)、真正な関係性の構築 (07) に重ね合わせることができであろう。

本稿は、論文要旨に限定した内容分析であった。そのため、一つひとつの論考を精査したわけではない。その意味では、粗削りな文献調査論文といわざるを得ない。また、本稿では、データベース作成にあたり「Scopus」を採用したが、「Web of Science」など、他のデータベースを採用した場合、あるいは、複数のデータベースからリストを生成した場合には、本稿の分析結果と異なる傾向が示されることも大いに考えられる。さらには、本稿で紹介した MJCSL 誌など、SL関連研究では、主要雑誌とされるもののうち、Scopusに登録されているのは、IJRSLCE 誌のみである¹³⁾。そのため、これらの主要雑誌に限定した文献調査や、これらの所収論文を加えたデータベースによる分析の可能性や必要性などは、今後の検討課題である。ひとまず、本稿は、サービス・ラーニングの「伝統的な」本質であるはずの社会変革性を、「批判的」という視点から改めて思い起こすための契機としたい。

注

- 1) さしあたり、善教将大 (2025) など。
- 2) 英語等の外国語文献の抄録・引用文献データベースは、複数存在する。本稿では、収録雑誌数の多さ、収録分野の広範さ、スクリプトによ

る検索アルゴリズムの定義のしやすさ等を考慮して、Scopusを採用した。

- 3) サービス・ラーニングに関する論文の検索にあたっては、論文題目、要旨、キーワードのいずれかに service-learning あるいは service learning を含むものとした。また、論文等の形態は、論文 article に限定した。なお、Scopus における検索スクリプトは、以下の通りである。
TITLE-ABS-KEY (“service-learning” OR “service learning”) AND (LIMIT-TO (DOCTYPE , “ar”)) AND (EXCLUDE (PUBYEAR , 2025)) AND (LIMIT-TO (LANGUAGE , “English”))
- 4) 批判的サービス・ラーニングに関する論文の検索にあたっては、論文題目、要旨、キーワードのいずれかに critical service-learning あるいは critical service learning を含むものとした。また、論文等の形態は、論文 article に限定した。なお、Scopus における検索スクリプトは、以下の通りである。
TITLE-ABS-KEY (“critical service-learning” OR “critical service learning”) AND (LIMIT-TO (DOCTYPE , “ar”)) AND (EXCLUDE (PUBYEAR , 2025)) AND (LIMIT-TO (LANGUAGE , “English”))
- 5) Jacoby (2015) の記述による。
- 6) Partnerships 誌は、発行元のノースカロライナ・キャンパス・コンパクト、および、その全国組織であるキャンパス・コンパクトの組織改編の影響を受けて、2020 年に休刊となっている。
- 7) 2025 年 8 月 13-15 日に、南アフリカ共和国・ダーバンで開催された 2025 年年次大会 (IARSLCE2025) での会務報告において示された会員数による。
- 8) これ以外の先述の雑誌は、Scopus の格納雑誌ではない。すなわち、サービス・ラーニング研究の専門学術雑誌ではないところで、サービス・ラーニングに関する研究論文数が伸長しているということは、その教育手法として、その社会改善の可能性について、注目と関心が集まっているということであろう。
- 9) IARSLCE2025 において採択された、IARSLCE の新しい Global Research Agenda の起草にあたり、世界各国の研究と実践の関心をワークショップ形式で収集したミネソタ大学の Andrew Furco 氏の IARSLCE2025 での報告「AN ANALYSIS OF GLOBAL RESEARCH INTERESTS AND TRENDS: Findings from

IARSLCE’s Global Research Agenda for Service-Learning and Community Engagement」によれば、Research Agenda Section ごとにみた関心の分布で、Equity and Societal Advancement への関心は、北米、中南米やアフリカで高く、アジアでは低かったという。

- 10) 「社会参画する大学」という訳語については、ゲルモンら著、山田一隆監訳 (2015) が詳しい。
- 11) この時期の米国高等教育政策と市民学習、サービス・ラーニングへの期待については、山田一隆 (2016) が詳しい。
- 12) こうした潮流は、国際サービス・ラーニング地域貢献学会 (IARSLCE) における論議でも顕著になっている。筆者が参加した 2025 年 8 月、南アフリカ共和国・ダーバンで開催された 2025 年会議においても、その熱量を強く感じたところである。すなわち、アジアを中心とした教育手法としてのサービス・ラーニングへの関心に対して、中南米、アフリカの研究者、実践者からは、社会改善への志向性が乏しいとの厳しい批判がある。このことは、当該学会における米国以外の会員の増加とともに高まる傾向にあり、学会名から「サービス・ラーニング」を外してはどうか、といった極端な論調が飛び出すまでになっている。
- 13) Web of Science でも同様。

参考文献

- ゲルモンら著、山田一隆監訳 (2015) : 『社会参画する大学と市民学習 アセスメントの原理と技法』、学文社、328p.
- Simpson, R.H. (1950). An evaluation of motivation, assignment making, problem procedures, and “service learnings” in a school system. *Journal of Educational Research*, 44-1, 1-13.
- Sanoff, H. (1974). Community Development Group: A Service Learning Program. *Journal of Architectural Education*, 28-supplyment1, 95-96.
- Jacoby, B. (2015). *Service-Learning Essentials: Questions, Answers, and Lessons Learned*. Jossey-Bass. 322p.
- Jacoby, B. (1996). Service-Learning in Today’s Higher Education. in Jacoby, B. et al. *Service-Learning in Higher Education: Concept and Practice*. Jossey-Bass. 3-25. (ジャコビー著、山田一隆訳 (2007) : 「こんにちの高等教育におけるサービスラーニング」。『龍谷大学経済学論集』47-1/2、43-61。)

- Mitchell, T.D. (2007). Critical Service-Learning as Social Justice Education: A Case Study of the Citizen Scholars Program. *Equity & Excellence in Education*, 40, 101-112.
- Mitchell, T.D. (2008). Traditional vs. Critical Service-Learning: Engaging the Literature to Differentiate Two Models. *Michigan Journal of Community Service Learning*, 14-2, 50-65.
- Neururer, J., & Rhoads, R. A. (1998). Community service: Panacea, paradox, or potentiation. *Journal of College Student Development*, 39(4), 321-330.
- Robinson, T. (2000). Service learning as justice advocacy: Can political scientists do politics? *PS: Political Science and Politics*, 33-3, 605-612.
- Rosenberger, C. (2000). Beyond empathy: Developing critical consciousness through service learning. In C. R. O'Grady (Ed.), *Integrating service learning and multicultural education in colleges and universities*, 23-43. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- 山田一隆 (2016) 「米国高等教育におけるサービスラーニング 市民学習と学習成果をめぐる政策と評価枠組の概観」、『政策科学』23-3、113-136。
- 善教将大 (2025) 『民度 分極化時代の日本の民主主義』、中央公論新社、325p.